

スピヴァクは読まれることができていたのか —— 特に日本において¹ (Can You Read Spivak—Particularly in Japan?)

宮 原 一 成

1.

ガヤトリ・スピヴァク (Gayatri Chakravorty Spivak) の文章の晦渋さには、早くからいろいろな批判があった。有名なところでは、スピヴァクが1999年に出版した『ポストコロニアル理性批判 (A Critique of Post-Colonial Reason: Toward a History of the Vanishing Present)』に対して、テリー・イーグルトン (Terry Eagleton) が同年5月13日に *London Review of Books* 紙上に載せた書評「安ピカもののスーパーマーケットにて (In the Gaudy Supermarket)」がある。ここでイーグルトンは、「これ見よがしに不透明 (pretentiously opaque) な「スピヴァク一流の比喩の泥沼 (Spivakian metaphorical muddle)」や「外部の社会とのつながりを絶つかのような私的なイディオム (hermetically private idiom)」に苦言を呈し、そして「言葉の組成をあつかう際の無頓着なやり方 (its careless way with verbal texture)」と「他人の理論を頻繁に、短く切り詰めて (しかもしばしば主旨の誤解を含む形で) 抜粋引用する癖 (its theoretical soundbites)」を論難した。たとえそうした言葉づかいをする動機が、「西洋的理性の見せかけの透明性を転覆すること (subvert the bogus transparency of Western Reason)」にあるにしても、その文体は読者を遠ざけるものであり、スピヴァクの社会改革的意図にとって、かえってマイナスであると断じた。

スピヴァクが勤務するコロンビア大学の学部学生によるウェブ・マガジン *The Current* の2006年春号にも、スピヴァクの難解すぎる文章を酷評する記事が載っている。英文学専攻の学生 Jen Spyra は、スピヴァクを「読みづらさで悪名高い (infamously hard to read)」と断罪し、スピヴァクの主著のひとつ「サバルタンは語るができるか (“Can the Subaltern Speak?”)」のなかからとった一文を、「悪いもののいい例 (a good example of what's bad)」として紹介までしている。そして、「複雑な思考を表現するには、複

雑な表現方法が必要 (A complicated idea may just require a complicated rendering)」という考え方を強烈に批判している。

むろん、スピヴァクを擁護する者も多い。たとえばイーグルトンの『ロンドン・レビュー・オブ・ブックス』の書評に対しては、ジュディス・バトラー (Judith Butler) がすぐさま反応した。バトラーは同紙に投稿し、「イーグルトンは、スピヴァクが近づきたい文体で書いているとって非難する。だが、スピヴァクが、世界的諸次元における政治的現況に対して加えた批判的追及が、何万人もの社会活動家や研究者に届いていることは、周知の事実である (He faults her for writing in an inaccessible style, but we all know that her critical interrogation of the political status quo in its global dimensions has reached tens of thousands of activists and scholars)」と述べ、スピヴァクの文章や論旨が広汎に受容されていることを強調した。そして、「あまりにもスピヴァクが受け入れられていること (her well-earned popularity, her ability to reach so many people) に対して、イーグルトンはルサンチマン (*ressentiment*) を抱いているのだろう」と書いてみせた (同紙1999年7月1日付掲載)。

同時期にバトラーは、*The New York Times* 紙にも、「悪文家、噛みつき返す (A 'Bad Writer' Bites Back)」と題した記事を発表し、そこで「むろん、人文学に携わる学者たるもの、みずからの著作物がいかに日常生活の本質を伝え、反映しているかを、明確に説明できる能力を持っているべきである。しかし、そうした学者たちは、常識を疑い、常識が暗黙のうちに人々に押しつける様々な前提を疑問視し、慣れ親しんだ世界を新しい目で見える見方を喚起する義務も、同様に負っているのである (No doubt, scholars in the humanities should be able to clarify how their work informs and illuminates everyday life. Equally, however, such scholars are obliged to question common sense, interrogate its tacit presumptions and provoke new ways of looking at a familiar world)」という主張を繰り広げている (1999年5月20日付)。ちなみにこの記事は、学術誌 *Philosophy and Literature* による悪文コンテスト (Bad Writing Contest) で、バトラーが1998年に見事一位に選ばれたことへの反論である。他人ごとではなかったのだろう。そういえば、前述のスパイラは、「スピヴァクの文章よりひどいのが、デリダ (Jacques Derrida) やバトラーだ」と書いていた。

スピヴァクの思想を解説する本を書いたスティーヴン・モートン (Stephen Morton) も、スピヴァクの援護射撃に駆けつけた一人だ。モートンはバトラー

とはやや異なり、スピヴァクの文書が読みづらく近づきにくいという前提は認めている——

[……] 彼女の言語と文体はしばしば複雑できわめて難解に思われ、その著作に初めて接する者をときに当惑させる。さらに問題なのは、こうした難解な散文のスタイルがスピヴァクの著作が標榜する政治的目的に矛盾するように思えることだ。文体のむずかしさは、「第三世界」の抑圧された人びとの声と政治的主体性を雄弁に語ることに矛盾しないのだろうか？（モートン、18頁）

モートンはそのうえで、彼女には難解に書く必要があったのだ、という論を展開する。まずモートンは、1993年に行われた対談におけるスピヴァクの発言を引きつつ、弁護の議論を始める——

スピヴァクがあるインタビューで述べているように、

「いやはや！ スピヴァクはむずかしすぎて分からんよ！」という昔からよくある物言いを聞くとね、最近では笑って、こう言うことにしてるの、「わかったわ、それじゃ、あなたのためにだけ、簡単な文で言ってあげる、でもそれじゃきっと困るわよ。わたしは単文でこう言ってあげる、「私たちにはわかりやすい文はだますことがわかってます」。

「わかりやすい文はだます」というスピヴァクの言い方は、「単文」によって作られる基本的な文法構造がその文の持つ意味内容によっていかに裏切られるものかを例証する。しかしこうした例でスピヴァクがやろうとしているのは、単なる言葉の遊びではない。スピヴァクは自分の議論を人には近寄りたが散文で提出しているように見えるが、実は彼女がおこなっているのは、西洋の批判的思考の伝統的仕組みに従おうとしない仕方、さまざま異なる歴史や場所や方法論を注意深く結びつけようとするのだ。仕組みに従うことを拒否するこうした姿勢は、今はやりの学問的・理論的流行のしるしにはとどまらず、意欲ある読者に、私たちがどのように植民地主義の波をかぶった文学的・社会的・経済的テクストを読解すべきかを指し示す、計算された意識的な修辞的戦略なのである。（モートン、18-19頁、傍点は原文のまま）²

ポイントは、イーグルトンもモートンも（さらにはおそらくバトラーも）、「西洋の批判的思考の伝統的仕組みを拒否する身振りとしての複雑な文体の意義」なのだが、一方はこれを障害物として断罪し、他方は、同じものを不可避の表現形として弁護し称揚する。議論は見事に平行線である。

だが、バトラーやモートンの弁護は、実態に即していないのではないだろうか。そもそもスピヴァク自身、自分の文章の難解さにどれほど積極的・戦略的な意味づけをしているのか、怪しいところがある。

上に見たモートンの文章には、対談におけるスピヴァクの発言が引用されていた。しかし、モートンは割愛しているが、じつはこの発言の直前に、スピヴァクは次のような言葉も発していた――

Most often, what readers say to me is not exactly what I've been thinking, and that's okay. I mean, one learns But [. . .] it's so old-fashioned that I'm always hesitant to say it, but you said it before: My words are becoming simpler. They are becoming simpler because I can't *do* anything with the more complicated machinery. It's getting in the way, you know. It's getting in the way. On the other hand, I'm absolutely antimystical. I'm absolutely, like 200 percent, antimystical. So, I don't know what to do with this particular development. (Darius and Jonsson 33)³

本当にしょっちゅうあることなのですが、私の文章を読んだ人が言うことが、私が考えていたこととは完全に一致しないのです。つまり、まあ、私もそこから学習するわけですが……。しかし、[中略]あまりに古めかしくて口に出すのが気恥ずかしいのですけれども、でも以前あなたはこうおっしゃいましたね――私の使う言葉がシンプルになってきている、と。なぜ私の言葉がシンプルになっているかという、それは、もっと複雑な仕組みを使っている、何にも仕事ができないからです。複雑な仕組みというものは、邪魔、ええ、邪魔になっているのです。その一方、私は神秘主義には断固反対です。私は、それこそ200パーセントと言っているくらい、反神秘主義者です。ですから、この「使う言葉がシンプルになっていくという」展開に対して、何をしたらいいのか、私もわかっていません。(筆者による試訳。[]内の補足も筆者)

スピヴァクは1993年の時点で、「もっと複雑な仕組み」が、彼女の仕事の「邪魔になっている (getting in the way)」と認識しているのである。ということは、バトラーやモートンがスピヴァクの弁護活動にいそんでいる時期よりずいぶん前に、もうスピヴァクは「西洋の批判的思考の伝統的仕組みに従おうとしない仕方」という「計算された意識的な修辞的戦略」を、ただの障害物として扱い、捨てる方向へと踏み出すことも考えていたわけだ。モートンは、この事実を伏せている。故意だろうか。

そして、さらに興味深いのは、引用の第一文である。意図した意味が読者に正確に伝わっていないことが多い、という現実を、スピヴァク自身が認めていることを、この文は明示しているのである。スピヴァクは、正確に読まれることができていたのか。そのことに本人自身が否定的な印象を抱いている。だとすれば、それは《語る主体》の語りが聞き届けられるのか、という彼女の最大の関心事にもつながる話になってくる。本稿の関心事は、スピヴァクの難解な文章が、バトラーの言うほど、本当に正確に受容されているのかという点である。この問題意識は、見た目ほど低レベルなものではない。かなり本質的な部分を突くものなのだ。

そして、日本においてはどうか。日本では、スピヴァクの文章を原語で読む人間がまだまだ多数派ではない。翻訳というフィルターを通して読むことが一般的な地域である。そういう環境の日本において、スピヴァクがどの程度、受容されてきたのか。この点についても検証する必要がある。翻訳という問題は、《語る主体》を別の主体が表象・代弁するという、スピヴァクのやはり中心的な関心のひとつにつながるからである。

2.

個人的なことだが、ここで懺悔をしておきたい。筆者はこれまで、スピヴァクの書きものをまともに読んだことがなかった。スピヴァクを紹介する文章、スピヴァクの議論を援用した論文、それから彼女が福岡市で講演したときに聞いた内容、そういった耳学問や間接的な情報収集で済ませてきた。それがこのたび、構想中の論文に援用したら効果的かも、と思いつき、また、ある学会で、スピヴァクの議論を援用する内容の研究発表の司会を引き受けることになり、その準備のためにも必要だということにもなって、ようやく本腰を入れてスピヴァクを読むことにしたという次第である。英語文学を専攻する大学教員としては、猛省しなければならない体たらくだ。

本腰を入れるとか言いつつ、時間がなからという口実で、筆者はまず邦訳書に手を伸ばした。反省を行動につなげられない人間だと、我ながら思う。まず目を落としたのが『サルタンは語ることができるか』（上村忠男訳）だ。ところが、手っ取り早さをもくろんだ割には、読書がいつこうにはかどらない。邦訳を読んでいても、何度も首をひねられる。スピヴァクの頭にあると思しき論理を愚直に辿ろうとしても、どうにもそれが難しい。

そこで、どうせ呻吟させられるのなら原文で苦しもうと腹をくくり、スピヴァクの英文を取り寄せていくらか読んでみた。すると、スピヴァクの書く

英文の「悪文」ぶりとはまた別に、スピヴァクを邦訳で読む日本の多くの読者に固有の、ある看過できない問題が浮かび上がってきたのである。

ご存じの方も多いと思うが、スピヴァクの「サバルタンは語るができるか」は、社会の下層に置かれている人間に声をあげさせたり、知識人がその声を代弁したりする行為について、ミシェル・フーコー（Michel Foucault）とジル・ドゥルーズ（Gilles Deleuze）の考え方を指弾することから始まる。スピヴァクによれば、ドゥルーズたちは、被抑圧者に声を与えることは十分に可能なことだと考えており、自分たち知識人がその仲立ちとして働くことも十分に可能だと考えている。ドゥルーズたちは、被抑圧者という「主体」の声の受け渡しをする際に、仲立ちに立つ批評家はまったく透明な黒子に徹することができる、^{くろこ}と思いついでいる。その思い込みがナイーブだ、とスピヴァクは言う。

ここで、邦訳書には次のような文が出現する――

フーコーは、生産の社会的諸関係を再生産するにあたってイデオロギーがはたしている役割を否認することにもなう、もうひとつの帰結をも明らかにしている。被抑圧者をなんの疑問もなしに主体として、あるいはドゥルーズが感嘆して評しているように「囚人たち自身が語るのことができるような状態をつくりあげる」「客体存在」として価値づけようとするのがそれである。（スピヴァク、『サバルタンは語るができるか』、上村忠男訳、11-12頁）

引用の第二文は、読めば読むほど不可解な文である。上村訳が上梓されてすでに10余年、これまでこの文が自然に読み流されていたというのは、かなりの驚きでさえある。この文では、「主体」と「客体存在」が同一物、もしくは互換可能なものとして並列表現されている。素朴な疑問だが、どういう理屈で《主体》と《客体》が同一ということになるのか。この文で「客体存在」と呼ばれているものは、「つくりあげる」という行為の《主体》ではないか。それがなぜ「客体」という呼称を付せられるのか。詳細な説明もないままでは、おいそれと納得できるような話ではないはずだ。

上村はフライング気味に議論の先取りをしてしまったのか。この本のもう少し後のほうで、スピヴァクは、「主体としての他者」に関するフーコーやドゥルーズの無邪気な考えへの批判を展開している。その批判の枠組みを、なんとなくこの時点に持ち込んでしまい、ここでドゥルーズが「主体」イコール「客体存在」と述べていると考えることにしたのだろうか。

だとしたら大変な勇み足である。それでは、囚人に発言権を与えようとし

たフーコーの活動において、《語る主体》となる囚人たちが、フーコーにとってはあくまで《客体》であったということを、フーコー自身がしっかり自覚し、ドゥルーズもその認識を共有していたことになる。となると、スピヴァクにはフーコーを批判する必要などないことになってしまう。議論自体が成立しなくなるのだ。

ちなみに、同一の箇所はたまたま別の日本人研究者によっても抄訳されていた。崎山政毅による1996年発表の訳文はこのようになっている——

フーコーは社会的生産諸関係の再生産におけるイデオロギーの役割の否認という別の当然の帰結を分節化している。それはつまり、主体としての被抑圧者に疑問を抱かずに価値付与することであり、「対象の存在」は、ドゥルーズが賛意を示しつつ論評しているように、「囚人たちが自らを語るができるような諸条件をつくり出すためにある」のだ。(崎山、154頁)

崎山訳は、さらに不可解だと言わざるを得ない。第一文は、上村訳とは全く違う内容になっている。上村訳では、フーコーが明らかにしている「帰結」というのは、「イデオロギーがはたしている役割を否認する」姿勢が生み出す結果のひとつ、とされている。むろん、これが正しい解釈である。ところが崎山は、「という」というつなぎ言葉を用いているから、この「帰結」の内容が、イコール「イデオロギーの役割の否認」だ、と解釈しているわけである。これでは因果関係がおかしい。

ただし、第二文に目を移せば、崎山訳もやはり「主体」のとらえ方がわかりにくいのは、上村訳と同じだ。上村が「客体存在」と訳したものを、崎山は「対象の存在」としているが、崎山もおそらくこれを「主体」と同一視している。

崎山の訳文は、「主体としての被抑圧者に疑問を抱かずに価値付与すること」の部分と、「対象の存在」は」以下の部分とのつながりをルーズに処理している。そのため論理がきわめて追いつらい。だが、崎山訳は、語るためのすべを囚人に与えるための、何らかの道具か装置のことを、「対象の存在」と呼んでいるように思われる。

では、その道具なり装置なりは、なぜ「対象の存在」という言葉で呼ばれるのか。それとも、「対象の存在」という言葉に引用符がついていることから見て、これを一種の皮肉な引用として捉えるべきなのか。「囚人だって、ちゃんと声をあげることができるのだ」と強弁したいがために、フーコーらは、それをあたかも具体的な「存在」であるかのように見なしたがっている、と

ということか。だが、それなら「主体の存在」とするべきではないか。その存在は、語るという行為の主体となるはずなのだから。

邪推かもしれないが、崎山は、主体や客体の概念に関して、きわめてアクロバティックな論理を頭の中で捏造して、自分を納得させたのではなかろうか。そして、この崎山の訳文をすんなり読みこなしている読者がいるというのなら、その読者の頭のなかの論理は、筆者にはまったく近寄りたがたい。

スピヴァクの英文で、該当部分を見てみよう。

Foucault articulates another corollary of the disavowal of the role of ideology in reproducing the social relations of production: an unquestioned valorization of the oppressed as subject, the “object being,” as Deleuze admiringly remarks, “to establish conditions where the prisoners themselves would be able to speak.” (Spivak, “Can the Subaltern Speak?” 274)

何とも拍子抜けである。引用符に囲まれた“object being”を上村は「客体存在」と訳し、崎山は「対象の存在」と訳した。だがどう考えても、この“being”を「存在」という意味の名詞ととらえるのは間違いだ。

“as Deleuze admiringly remarks”という挿入部を外してみれば見えやすくなるのだが、“being”は分詞構文を形成する現在分詞であり、その前に、分詞構文の主語として“object”という名詞を載いている、という構造である。

ついでに言うと、“being”の後に続く“to establish”で始まる不定詞句は、名詞的用法である。崎山のように、副詞的用法（目的の意味）で解釈するのは誤りだ。

疑念があるなら、スピヴァクが引用元としているフーコーとドゥルーズの対談記録の英語版を参照してみるといい。そこにははっきり、“It was on this basis that you organised the information group for prisons (G.I.P.), the object being to create conditions that permit the prisoners themselves to speak” (Foucault, “Intellectuals and Power” 206) と書かれている。⁴ 崎山は同一論文のなかで、フーコーとドゥルーズのこの対談「知識人と権力」からの引用も行っている。引用には邦訳書に加えて仏文のページ番号表示も添えてあるから、両方参照したはずだ。「知識人と権力」には蓮實重彦によるフランス語からの邦訳がある。それによれば、該当箇所は、「あなたが監獄情報グループを組織されたとき、それは次のような基盤の上になりたっていました。つまり、囚人たちが発言しうる条件をつくりあげるということで

す」(フーコー、「知識人と権力」、258頁)となっている。「客体」「対象」などが紛れ込んだりはしていない。

英文で“object being”以下の部分は、分詞構文として読まなければならないし、この“object”の意味は、「客体」や「対象」ではなく、「目的」と解釈しなければいけない。よって、上村訳を土台にして訳文を試しに書き直してみるならば、次のようになるだろう——

……すなわち、被抑圧者に、なんの疑問もなしに主体として高い価値を付与する行為であり、その行為の「目的」とは、ドゥルーズが感嘆して述べている言葉を借りて言えば、「囚人たち自身が語ることのできるような状態をつくりあげること」なのだそうだ。

ドゥルーズたちに、「主体」と「客体」「対象」の同一視や混乱はない。⁵ そこに見られた奇妙な同一視に関しては、別の人間に責任がある。

3.

あとふたつ、『サルタンは語るができるか』からの訳例を検証してみよう。

スピヴァクの議論によれば、被抑圧者の声の中継をするフーコーやドゥルーズなどの批評家や知識人は、あいだに何のフィルターもかけたりしないと言い張って透明を気取ってみても、実際には透明にはなれない。中継するにはどうしても“represent”「表象／代弁」する行為を伴うわけだから、表象するものと表象されるものとのあいだの関係についてきちんと考えておく必要がある。シニフィアンとシニフィエの恣意的関係を考える記号論的な目が要求されるのである。その点を無視して、シニフィアンとシニフィエの間が、透明接着剤で結びつけられ一体になっているかのように考えるのは、間違いだとスピヴァクは言っている。安易に記号論的な考え方を捨て去るのは非常に危険だ、と主張しているのである。

ドゥルーズがいくら「審査員などになって価値判断を持ち込むことは拒否する」と力んでみても、中継者はその立場上、必然的に被抑圧者に対する「利害」を持ってしまう存在である。「透明」な「表象者／代弁者」にはなりようがない。それがスピヴァクの主張だと思われる。

ここでスピヴァクの英文と、上村の邦訳文を並べて見てみよう。比較の便宜上、スピヴァクの文章には文単位で番号を打ち、邦訳との対応を示すことにする。また、特に本稿が議論的になりたい箇所は、太字で示してある。

スピヴァク原文 (279-80)	上村忠男訳 (27頁)
<p>① The produced “transparency” marks the place of “interest”; it is maintained by vehement denegation: “Now this role of referee, judge, and universal witness is one which I <i>absolutely refuse</i> to adopt.”</p>	<p>(1)産出された「透明性」は「利害」のありかをマークしている。そして、それは激しい否認の言葉によって主張されている。「さて、このレフェリー、ジャッジ、そして普遍的な証人という役割こそは、わたしが引き受けることを断固として拒絶するところのものなのです」。</p>
<p>② One responsibility of the critic might be to read and write so that the impossibility of such interested individualistic refusals of the institutional privileges of power bestowed on the subject is taken seriously.</p>	<p>(2)しかしながら、批評家の責務のひとつは読んで書くこととあってよい。だとすれば、主体に授けられた権力の制度的諸特権をこのように利害にもとづいて個人主義的に拒絶することは不可能とされているということ、このことはまじめに受けとめられるべきであろう。</p>
<p>③ The refusal of the sign-system blocks the way to a developed theory of ideology.</p>	<p>(3)さらには、記号システムの拒否は発達したイデオロギー理論への道を塞いでしまう。</p>

訳文の問題点は(2)に集中している。原文②にはない「しかしながら」を補ったのは、文の流れがちゃんと読めている証拠であり、日本語読者への細やかな配慮として評価したい。しかし、その後の流れがおかしい。「批評家の責務」が、とにかく何でもいから単に「読んで書くこと」だというのは、あまりにも中身がない。それは確かに仕事の一部ではあるだろうけれども、“responsibility” とするには弱すぎる。英文②のなかの “so that” は、《結果》の用法として「だとすれば」と訳するよりも、《目的》の用法ととらえた方が、筋が通る。

「まじめに受けとめられるべき」という訳文も曖昧さが残る。英文には「べき」にあたる言葉はどこにも書かれていないのだ。言わずもがなだが、なにかの主張をする文章においては、主観的判断による提言「べき」と、事実の

記述「である」とは、明確に区別しなければならない。

また、「利害にもとづいて個人主義的に拒絶する」という流れにも違和感がある。このままでは、ドゥルーズが、「利害にもとづくからという理由で断固拒絶する」と発言しているように読めてしまう。そうではないはずだ。言ってもいないことを言ったことにしてはいけない。

この文章は、語る主体とそれを「表象／代弁」する行為の関係について議論しているわけだから、その文章においては、ある発言がある人の口から出たという書き方をするときには、細心の注意を払って然るべきだろう。

逐語訳ではないが、②の内容はおおよそ以下のように解釈できるだろう。

(批評家が代理で表象する) 被抑圧者の主体には、権力に伴う各種の特権が自動的に付与されてしまうことは、制度的に決まっていることである。だから、こういう意味での利害関係を持つ批評家が、その特権を、ドゥルーズのように個人の好き嫌いによって否認しようとしても、それは不可能なのである。その不可能さを、重大事としてきちんと認識されるように文章を読み、文章を書くのが、批評家の責任のひとつだといえるかもしれない。

「批評家の責務」は、ただの「読み書き」よりも、ずっと細かく規定されているのである。

さらに、『サバルタンは語ることができるか』の第3セクション初めのほうには、このような文章がある。

スピヴァク原文 (292)	上村忠男訳 (64頁)
④ I have tried to argue that the substantive concern for the politics of the oppressed which often accounts for Foucault's appeal can hide a privileging of the intellectual and of the "concrete" subject of oppression that, in fact, compounds the appeal.	(4)ここまで私が論じようとしてきたのは、多くの場合にフーコーのアピールの説明理由となっている被抑圧者たちの連合のポリティクスに実質論的(substantive) なかたちでの関心を寄せることは知識人および 事実上そのアピールをつくり上げている「具体的な」 抑圧の主体がそこでは特権化されているという事実を隠蔽することになりかねない、ということであった。

<p>⑤ Conversely, though it is not my intention here to counter the specific view of Derrida promoted by these influential writers [i.e., Terry Eagleton and Perry Anderson], I will discuss a few aspects of Derrida's work that retain a long-term usefulness for people outside the First World.</p>	<p>(5)こんどは逆に、これらの影響力のある著述家たちが推進してきたデリダ解釈に反撃をくわえるのがここでの私の意図ではないけれども、第一世界の外にいる人々にとって長期的に見て裨益するところがあるとおもわれるデリダの仕事の二、三の面について論じておきたい。</p>
<p>⑥ This is not an apology. Derrida is hard to read; his real object of investigation is classical philosophy.</p>	<p>(6)これは弁明ではない。デリダはたしかに読むのに苦労する。それに、かれの真の研究対象は古典哲学である。</p>
<p>⑦ Yet he is less dangerous when understood than the first-world intellectual masquerading as the absent nonrepresenter who lets the oppressed speak for themselves.</p>	<p>(7)しかし、第一世界の知識人がみずからは不在の非代表者を装いつつ被抑圧者たちに自分で語らせようとしているのに比べれば、デリダは、理解さえすれば、危険度は遥かに少ないのである。</p>

順序は前後するが、まず前座として⑦と(7)を見てみよう。⑦のなかに見られる関係代名詞“who”の先行詞を、上村訳は“the first-world intellectual”だと解釈しているが、そうではなく、“the absent nonrepresenter”が先行詞だと解釈したほうが、それまでの論旨からして正確なセンテンスになると思われる。「不在の非代表者」とは、すなわち「透明な代弁者」のことである。だから⑦の大意は、「第一世界の知識人（つまりフーコーやドゥルーズ）は、我々は、抑圧されている人びとに自分の声で語らせているのであり、我々自身は、不在と言っていいほど透明な代弁者なのだ、というふりをする。それに比べれば、デリダのほうが、理解さえされれば、まだしも危険は少ない」ということだろう。

同じような関係代名詞節と先行詞に関わる問題は(4)にもある。日本語だけ

を読んでいたら、「多くの場合にフーコーのアピールの説明理由⁶となっている」という部分が、「関心を寄せること」を修飾しているという構造は、きわめて見えづらいだろう。④におけるスピヴァクの英文のロジックは、そこまで不親切ではない。

さらに(4)には、「知識人および抑圧の主体」が実践している行為の内容がわかりにくい、という問題もある。具体的な抑圧の主体、つまり権力者たちが、「事実上」フーコーの「アピールをつくり上げている」とは、どういう行為を指すのだろう。「アピールをつくり上げている」というルーズな日本語表現が、「アピールの説明理由となっている」という文言と、内容的に区別がしづらいこともあって、筋道が実に辿りにくい。

スピヴァクの言わんとするのは、次のようなことだと思われる——フーコーは、被抑圧者たちの政治的立場に関心を寄せており、その関心に基づいて、G.I.P. 結成などの具体的な行動によるアピールを行っているわけだが、そうした関心ばかりが表に立つと、フーコーの意図に反してその関心が煙幕として働いて、知識人や権力者たちをかえって利することになりかねない、と。⁷ だとすれば、その権力者たちがフーコーのアピールに対して行うことの内容とは、「根拠付け」とは違うものではないか。

④のなかの“in fact”が(4)で「事実上」と解釈されているのが、非常にまづいように思われる。周知のように、“in fact”は、前言を修正するための言葉で、「(見かけとは違って) 実際は」という意味を表す。だから、煙幕の影に隠れた行為をあばく前置きとして使われているはずなのだ。そのロジックの流れをふまえるべきだろう。

そして、④にある“compound an appeal”というフレーズは、「アピールをつくり上げる」ではなく、法律用語として「金を払うなどの手段で、示談に持ち込んで解決する」という意味に解釈するのが、おそらく適切である。俗な表現で言うと、「裏から手を回すような形で、フーコーのアピールをチャラにしている」ということでないか。そう考えたほうが、この場のメカニズムは見えやすくなる。

ここまで本稿が行ってきたのは、はしたない揚げ足取りのあら探しでもなければ、したり顔の英文解釈指導でもない。誤訳くらい、筆者もしょっちゅうやっている。ただ、その誤訳や、誤読とおぼしき箇所が、スピヴァクにとって中心をなすような概念にまつわる部分にまで見られるものだから、これは捨ててはおけないと考えたのである。従来訳のところどころには、スピヴァクの真意を大きく外れる形で、「主体」と「客体」「対象」が一緒くたにされ、

フーコーやドゥルーズが言いもしなかったことで彼らを譴責する物言いが採用され、サバルタンと聞き手の間を仲介する者の主体の問題や、責任の構図と実践の行為内容が曖昧にされている箇所が見つかった。何らかの修正の手が加えられるべきではなからうか。

最重要概念の扱いに混乱がある翻訳にもっぱら頼ってスピヴァクを読む。それはスピヴァクを読んだことになるのか。和訳しか読まない読者にとって、スピヴァクはどれくらい正確に「語ることができていた」のだろうか。

4.

ここで、《よい翻訳》という問題に関するスピヴァクのスタンスを確かめよう。スピヴァクには、翻訳行為について書いた“The Politics of Translation”という文章がある。1993年発表のこの文章にも邦訳がある。1997年に『現代思想』7月号に掲載された「翻訳の政治学」で、訳者は鶴飼哲・本橋哲也・崎山政毅の3名である。ごらんのとおり、前述の崎山も共訳者として名を連ねている。

スピヴァクによれば、読者にとって原文テキストを近づきやすいものにするためには、ロジックを明快に提示することが必要だが、それに加えてもうひとつ、翻訳文に再現するのが望ましい要素がある。それはそれぞれの言語に固有の「レトリック」である。ここでスピヴァクがいう「レトリック」とは、ある意味で「ロジック」の対位概念である。「ロジック」は、明快な一貫性によって、飛び石を飛ぶようにして語と語をつないで意味を生み出す。一方、「レトリック」のほうは働き方が違う。「レトリック」は、「ロジック」が理路でつなげていった語と語の間に残される空間を、みずからの内部に取り込んで引き受けるのである。この空間のことを、スピヴァクは「言語の限界」(the limits of [...] language) とか、「沈黙」(silence) とか呼んでいる。

異言語のなかのレトリックを翻訳しようとすると、その翻訳者は、レトリックがロジックを攪乱 (disrupt) し始めるのを体験することになる。レトリックが、ロジックによっては見えない「沈黙」の存在を知らせてくるからだ (Spivak, “The Politics of Translation” 181他)。思うに、この「沈黙」の存在をいかにして知らしめるかという問題は、声なきサバルタンに語らせることに関するスピヴァクの中心的議論に、当然絡んでくる重大事だろう。

上の議論が展開されているのは、主に以下に引用する文章においてである。再び対訳形式で示そう。

スピヴァク原文 (181)	鶴飼哲・本橋哲也・崎山政毅訳 (30頁)
<p>⑧ Let us now think that, in that other language, rhetoric may be disrupting logic in the matter of the production of an agent, and indicating the founding violence of the silence at work within rhetoric.</p>	<p>(8)そこでつぎのように考えてみよう。そのもうひとつの言語8では、媒介的的行為者を作り出そうとすると、レトリックが攪乱するロジックとなり、そのレトリックの内部で働いている沈黙という起源の暴力を示唆しているのだと。</p>
<p>⑨ Logic allows us to jump from word to word by means of clearly indicated connections.</p>	<p>(9)ロジックによってわたしたちは、単語から単語へと、明らかかつつながりを意識しながらジャンプすることができる。</p>
<p>⑩ Rhetoric must work in the silence between and around words in order to see what works and how much.</p>	<p>(10)《対応する訳文なし》</p>
<p>⑪ The jagged relationship between rhetoric and logic, condition and effect of knowing, is a relationship by which a world is made for the agent, so that the agent can act in an ethic way, a political way, a day-to-day way; so that the agent can be alive, in a human way, in the world.</p>	<p>(11)レトリックとロジックのねじれた関係、知るための条件とその効果との関係によって、ある世界がエージェントのために形成され、おかげでエージェントは倫理的にも、政治的にも、日常的にも行動できる。だからこそエージェントは、人間的な仕方、世界に存在できるのだ。</p>
<p>⑫ Unless one can at least construct a model of this for the other language, there is no real translation.</p>	<p>(12)もしこうしたモデルをもうひとつの言語について、少なくとも構築できなければ、本当の翻訳は不可能なはずである。</p>

⑩に対応する訳文が欠落しているのは、長い文章を扱っていればありがちなケアレスミスだろう。だが、⑩のなかの“see what works and how much”に当たる邦訳（「何がどの程度作動しているのかを知る」）が表に出なかったせいで、(11)中の「知るための条件とその効果」における「知る」とは、何を^レ知ることなのか、わからなくなってしまったのは痛手だった。この翻訳を読んだ人は、「レトリック」のことを、いったい何を^レ知るための条件だと妄想したことだろうか。

さらに大きな問題が(8)にある。このなかの一文には、「媒介的行為者(エージェント)を作り出そうとすると、レトリックが攪乱するロジックとな^レる、と書かれている。つまり、ある条件が整いさえすれば、「レトリック」がある種の「ロジック」へと変貌する、と書かれているのである。これは、⑧の“may be disrupting”を進行形だと見抜けず、“disrupting logic”をひとつの名詞句と見てしまったことによる初歩的な誤読だが、看過はできない。何らかの条件付きではあるが、「レトリック」と「ロジック」の同一視が起こってしまったのだ。

スピヴァクのテキスト⑪によれば、「レトリック」は、ある事柄を知るための条件であり、「ロジック」は、知った結果である。二者は別物だとされているはずだ。前節までに見てきたような、《主体》《客体》の無理な同一視ほどの混乱ではないかもしれないが、それでも、はっきり区別すべきものが同一視されるという誤りの構図は共通している。スピヴァクのここまでの議論のロジックがちゃんと読めていれば、このような誤った同一視は発生しないと思うのだが。

ロジック一辺倒では駄目で、レトリックに目を配れというのが、この論文におけるスピヴァクのスタンスである。確かにまっとうな主張である。だが、いくらスピヴァクがそう言っているからといって、スピヴァクの修辭的文体に耽溺するあまり、翻訳者がロジックを軽視したり、翻訳者の勝手なロジックを暴走させたりしてはなるまい。

スピヴァク原文 (181)	鷓飼哲・本橋哲也・崎山政毅訳 (30頁)
⑬ The simple possibility that something might not be meaningful is contained by the rhetorical system as the always possible menace of a space outside language.	(13)ある発話に意味がないかもしれないという単純明快な可能性を、言語の外部にある空間にはそのような厄介さがつきものだから、ということで押さえ込んでしまうのが、レトリックのシステムだ。

ある可能性を「厄介さ」として「押さえ込む」、という訳文(13)の口調は、レトリックの機能に対して驚くほど否定的だ。⑬の“contained by”という箇所は、「押さえ込む」という強権的な響きで訳するよりも、「内部に含んでいる」としたほうが、上で見たような「沈黙」と「レトリック」の関係に関する説明に合致するだろう。(13)からは、ロジックとレトリックの関係が、翻訳者たちにはやはり飲み込めていないような印象を受けてしまう。

スピヴァクは言う——

あなたが、あなた自身のものからは隔たった言語と親しくし(Mitwegsein)、ときには自分の好みでこの言語を使いたいと思ひ、複雑な事柄を議論するまでになっているなら、そのときあなたは、日常生活ではこの言葉に馴染みのない読者に、テキストのある次元を、軽快で平易な調子で、近づきやすくすることができるようになりつつあると言える。もしあなたが、何かほかのものを、その内容の伝達を意図して速修した言語で書かれたものを近づきやすくしようとするなら、そのときあなたは、テキストを裏切り、どちらかといえば疑わしい政治性を見せていることになる。(スピヴァク、「翻訳の政治学」40-41頁)

When you hang out and with a language away from your own (Mitwegsein) so that you want to use that language by preference, sometimes, when you discuss something complicated, then you are on the way to making a dimension of the text accessible to the reader, with a light and easy touch, to which she does not accede in her everyday. If you are making anything else accessible, through a language quickly learned with an idea that you transfer content, then you are betraying the text and showing rather dubious politics. (Spivak, “The Politics of Translation” 191)

鶴飼・本橋・崎山の翻訳は、きつい言い方をすれば、スピヴァクの想定してなかった形で、「テキストを裏切り、かなり疑わしい政治的スタンスを晒す」ことになってしまった嫌いがある。

しかも、これまで見たように、その裏切りは、スピヴァクの議論の要石となる《語る主体(の権利)》や《表象/代弁する主体》に、直接関わりのある部分での裏切りであることが、少なくないのである。ところどころで、崎山や上村は、スピヴァクの論旨ではなく、スピヴァクが書いたテキストとは別物の、自前のロジックや自前のテキストを、スピヴァクのテキストと称して流布させたことになる。

訳者の仕事もまた、他人の語りを「代弁／表象」することである。代弁という行為の是非を問う前に、崎山と上村は、スピヴァクを正しく代弁しようという、少なくともその努力を十全に行っているだろうか？

彼らには釈迦に説法だろうが、翻訳者とは、和訳しか読まない者たちにとって、自分たちには満足に使いこなせない言語（英語）を自由に操る力を持った特権者である。また、翻訳者は、目標言語（日本語）を読む力のない原著者にとっても特権者である。そのような原著者には、自分の声をこの特権者がどう処理し代弁するかをコントロールするすべを持たない。ここに、『語れないサバルタン』と『サバルタンの声の代弁者を僭称する者』のつくる構図と、きわめて類似する状況が出現する。本橋は論文「サバルタンはスピヴァクできるか？——カルチュラル・スタディーズとポスト・コロニアリズムの位相」において、現在も「発話の場の権力の中核を占めるのは、相変わらず『イギリス語』だ。イギリス語ではない土着の言語^{ネイティブ}で発話している限り、『サバルタンは語れない』ままなのである」と指摘した（本橋、69頁）。まったくそのとおりである。であればこそ、英語を土着語に翻訳する人間の責任は重いのだ。

5.

ここまで翻訳上の問題点をあげつらってきたが、上に見た箇所以外はすべて問題のない翻訳に仕上がっている、という可能性だってもちろんある。問題点はごく少数で、その数少ない問題点ばかりが、筆者の目にたまたま留まっただけのことかもしれない。

それに、翻訳者たちに同情を禁じ得ない気持ちもある。スピヴァクの文体は本当に晦渋だ。ここまで彼女の英文をいくつか引用してきたが、それを読むだけでも、文章の難解さが実感できるだろう。白状するが、筆者には理解困難な箇所も数多くある。1パラグラフ読むのに3、4時間かかったこともある。そうした箇所も、スピヴァクの翻訳家たちは、とにかく翻訳してのけた。それには敬意を表したい。

それに、誤読・誤訳に関しては、スピヴァクにも責任の一端がある。この人の手前勝手なレトリックには本当に振り回されるし、ロジックも、明快どころか、じつにつかみづらい。

たとえば、「翻訳の政治学」には次のような一節がある。

If you want to make the translated text accessible, try doing it for the person who wrote it. The problem comes clear then, for she is

not within the same history of style. What is it that you are making accessible? The accessible level is the level of abstraction where the individual is already formed, where one can speak individual rights. (191)

冒頭の2文の論理関係は理解できる。「翻訳文を近づきやすいものにしたのなら、試しに、原文著者にとって近づきやすい訳文を書こうとしてみよ。そうしたら、そんなことは無理だとはっきりわかるだろう。なぜなら原文著者は、翻訳の目標言語の文体と、その文体が辿ってきた変遷の歴史には、馴染みがないのだから」というわけである。⁹

次に、スピヴァクは「あなたが近づきやすくしようとしているものとは何なのか？」と問いかける。冒頭の2文が、文体やレトリックは、言語間の移動がむずかしい、と言おうとしているのをふまえれば、彼女が想定している回答は、「ロジックの部分を近づきやすくしている」というものだろう。ここまではいい。

その後スピヴァクは「到達可能 (accessible) なレベルとは、抽象化のレベルに等しく、その抽象化のレベルにおいては、個人がすでに形成され、個人の権利を口にもすることもできることになっている」と書いている。前節の①や②で見た彼女の主張から察するに、翻訳の場において「個人がすでに形成」済みのレベルというのは、翻訳者という媒介行為者がレトリックとロジックの両方に通じ、ひとつの生活世界を確立できているので、「本当の翻訳」が可能になっている、そういう段階を指すのだろうと思われる。このロジックはけっして辿りやすいものではない。白状するが、筆者にはこの読みが正解かどうか、確信がいまだに持てない。

だがもっと大きな問題は、それが「到達可能 (accessible)」という単語を選択して表現されていることである。この「レベル」には、「ロジック」をいじっているような段階では到達できない、というのがスピヴァクの主張ではないのか。だとすれば、むしろここは、“accessible level”ではなく、“accessibility level” (近づきやすさの度合) と書くべきだろう。¹⁰ 不用意な語彙選択のために、ロジックが相当犠牲にされている。

本稿第3節では「客体存在」「対象の存在」という訳語の問題をとりあげた。そこでは訳者のロジック読解力と文法力にもっぱら焦点をあてた。だが、こうしてスピヴァクの文章につきあっていると、訳者が気の毒にも思えてくる。第3節で見たとおり、スピヴァクの英文の該当部分はこうなっている。

[...] the “object being,” as Deleuze admiringly remarks, “to establish

conditions where the prisoners themselves would be able to speak.”

じつは、本稿第1節でふれたスパイラが「悪いもののいい例」として紹介した文というのが、これだったのだが、よく見ると、不思議な点がひとつある。スピヴァクはなぜ、“the”と“object being”を引用符で分離するような真似をしたのか。本稿の第2節の終わりのほうで見たとおり、引用元では“the object being to create conditions …”となっていたというのに。

つまり、スピヴァクはこの文を引用する際に、ドゥルーズの発言のなかにもともとあった“the”をわざわざ外し、そしてスピヴァク自身の言葉として、新たに“the”を付したのである。結果として、“the ‘object being’ […] to create conditions …”という文が出来上がった。そのため、上村も崎山も、ここで“the”が切り離され、‘object being’があたかもひとつの名詞フレーズをなしているかのように見えてしまう点に、惑わされた可能性がある。スピヴァクの不用意な文体が、誤解を招いた好個の例と言えらう。

たかが引用符ひとつに目くじらを立てるな、と軽くいなせる話ではない。よく考えてみよう。引用符をどこに置くかという問題は、引用する者と引用される者のあいだで、言葉の所有権の境界線をどこに引くか、という政治的問題に直結する。そしてその際、境界線を引く権力は、引用者のものである。引用という行為には、言葉の所有権を巡る明確な力の不公平が現れる可能性が、常につきまとう。

だから、スピヴァクのように、いやしくも語りの権利や権力を論じる者であれば、他人の言葉を引用するにも細心の配慮をすることが求められる。しかし、問題の箇所ですピヴァクは、ドゥルーズの語った言葉の一部を奪い取り、自分の言葉のなかにねじ込んだのである。それは許されるのだろうか。

いや、ひょっとすると、スピヴァク自身、ドゥルーズの言った“object being”を、「客体存在」や「対象の存在」のような、ひとつの名詞句として勘違いして誤読してしまったのかもしれない、という疑念すら浮かんでくる。突拍子もない邪推だろうか。

フロリダ大学の J. Maggio は、2007年発表の論文ですピヴァクからこの箇所を引用しているのだが、その引用は、“valorization of the oppressed as subject, the ‘object being’”というところまで来て終止符で終わっているのである (Maggio 424)。明らかに、この“object being”を名詞句として捉えているのだ。同じような構文の誤解は、Robert Nichols の論文“Postcolonial Studies and the Discourse of Foucault: Survey of a Field of Problematization”にもある (Nichols 128参照)。スピヴァクに対抗しフーコー

を弁護する立場のニコルズ論文にも見られるのはご愛敬だが、“the ‘object being” の箇所に関しては、英語母語話者ですら読み違えることがあるという好例である。スピヴァクも誤読したという可能性は、ゼロとは言い切れないだろう。それほど、この引用符の打ち方は、不自然きわまりない。

誤読でなければ、さらに罪は重い。スピヴァクは、フーコーたちが透明な媒介者を気取っていることを痛烈に批判したが、彼女自身はドゥルーズを引用する際に、透明どころか、自分勝手な色づけを施したうえで、こき下ろしたことになる。「原文にひれ伏せ」という翻訳論はどこに行ったのか。第一世界の知識人の言説に対してなら、何をやっても許されるのか。イーグルトンの評にあった「サウンドバイト」というのは、たとえばこういうことを指しているのかもしれない。¹¹ いや、こき下ろすといっても、そもそもスピヴァクはここで何をこき下ろす必要があるのだろう。本稿第2節で「客体存在」という上村訳を点検した際に見たとおり、ドゥルーズたちが囚人を“object being”だと認識できているのなら、何のことはない、スピヴァクと同じ方向を向いていることになるのだから。スピヴァクの批判の論理は内部矛盾を来している。

もしも事情がこのとおりであったとすれば、邦訳者たちの責任を全面的に問うのは酷だろう。「客体存在」や「対象の存在」の問題に関する限り、邦訳者たちは、彼らなりに原文にひれ伏し、透明な存在になったのだから。

だがそれでも、もし彼らがスピヴァクの文体を擁護する立場をとるのであれば、翻訳の際にも、そうした文体の持ちうる意味と危険に対し、もっとと敏感であって然るべきだし、なによりもまず、学術書を訳す際には原注や引用元もきちんと検証し確認する、という基本的な姿勢をおろそかにしてはいけないだろう。そこで気付いたことがあれば、手軽な方法としては、訳者による註をつけて対処することもできたはずだ。ところが、そうした処置はされなかった。結果として、彼らはスピヴァクによるフーコーの曲解（意図的にしろそうでないにしろ）の伝播に、透明な存在として荷担してしまった。透明を気取っても責任逃れはできない。それはスピヴァクの翻訳者であれば、他の誰よりも理解していることだろうが。

1999年の *A Critique of Postcolonial Reason* に、スピヴァクは少々結論に手を加えた形で「サバルタンは語るができるか」を再録した。邦訳書『サバルタンは語るができるか』が日本で出版されて5年後、2003年に邦訳書『ポストコロニアル理性批判——消え去りゆく現在の歴史のために』が上梓されたが、ここでも、やはり「客体存在」という訳語を含め、本稿が問題

視した箇所がそのまま残っている（367頁参照）。¹²

不正確な読みに基づいて、さまざまな誤解が再生産され続けている、という心配は、杞憂なのだろうか。

結び

本稿第1節で紹介したように、スピヴァクは難解な文体に自分で見切りをつけたらしい。本当なら喜ばしいことである。¹³ スピヴァクの新しい文章や講演や対談などは、今も盛んに邦訳され、世に出ている。スピヴァクの英文も、それを写す邦訳文も、きっと今では難解さの減った文体で語られ、綴られているのだろう（それをいちいち確かめる気力も能力も筆者にはないが）。もしそうならば、今後のことは心配無用なのかもしれない。だが、既訳の邦訳については、なんらかの手が打たれていいのではないか。スピヴァクが厳密な意味においては読まれることができなかった時代の、こうした負の遺産は、きちんと解消しておくべきだろう。改訳・修正版——この際、文法力不足に起因する箇所の修正も含めて——の発表が望まれる。

註

- 1 本稿は、筆者が将来展開する予定の、ポストコロニアル理論や各種文学理論の伝播方法の秘儀性という研究の、前準備の一環としての位置づけを持っている。
- 2 ちなみに、スピヴァクが“a monosyllabic sentence”という句を使っている箇所、訳文は「単文」という語を使用しているが、「文法構造」が話題になっている文脈で、この訳語を使うのは不用意だろう。「私たちにはわかりやすい文はだますことがわかっています」(We know plain prose cheats) という文は、文法的には明らかに単文ではない。複文である。
- 3 スピヴァクが自分を評して“antimystical”だと強調しているところは、イーグルトンの“hermetically”という評語と併せて、筆者が構想している「現代理論の伝搬秘儀的手法」研究にとって、きわめて興味深い点であるが、今はさておくことにする。
- 4 文中の“G.I.P.”とは、“Groupe d'information de prisons”のことだ、と、この対談集の脚注に示されている。
- 5 崎山も上村も、みずからの訳文の論理に一縷の不自然さを感じていたの

- か、文と文のつながりをルーズにしたり、英語の同格表現に対して「あるいは」のようにぼやかす訳語をつけたりして処理している。
- 6 「理由説明」、もしくは「根拠」という訳語のほうがわかりやすいだろう。
 - 7 喜多加実代によれば、そもそもこのあたりのフーコー解釈については、スピヴァクの曲解があるという。説得力のある論考だが、今のところはとりあえず、スピヴァクの理解に沿って話を進めておく。
 - 8 「そのもうひとつの言語」とは、「母語ではない、自分が知らなかった言語」を指している。
 - 9 鶴飼らの訳文(40-41頁)は、ここで《try + 動名詞》のパターンを《try + to 不定詞》のパターンと混同してしまったらしく、「翻訳したテキストを近づきやすくしたいのなら、それを書いた人にとってそうするよう努めるべきである」と、あたかもこの試みを推奨しているかのような訳文になっている。
 - 10 ここは鶴飼らの訳でも「近づきやすさの水準」となっている。原文の表現を逸脱する訳語だが、むしろスピヴァクの言い損ないをバックアップする好判断と見たい。
 - 11 本稿第5節で引用した文章において、スピヴァクは“*Mitwegsein*”という、ハイデガーを意識した造語と思しき用語を唐突に挿入していた。これもサウンドバイトの一例かもしれない。読み手の負担を無駄に増やす悪癖である。
 - 12 なお、原書の *A Critique of Postcolonial Reason* の255ページにおいても、“the”と“object being”のあいだには引用符がはさまったままである。
 - 13 後藤浩子が「ガヤトリ・スピヴァク——デリダ以後」108-09頁で紹介している逸話を読む限り、スピヴァクがわかりやすい言葉で語りようになったというのは、どうも眉唾という気もする。

引用資料

- Butler, Judith. “A ‘Bad Writer’ Bites Back.” *The New York Times* 20 May, 1999. <<https://pantherfile.uwm.edu/wash/www/butler.htm>>
- Danius, Sara, and Stefan Jonsson. “An Interview with Gayatri Chakravorty Spivak.” *boundary 2: An International Journal of Literature and Culture* 20.2 (1993): 24-50.
- Eagleton, Terry. “In the Gaudy Supermarket.” *London Review of Books*

- 20.10 (13 May, 1999). <<http://www.lrb.co.uk/v21/n10/terry-eagleton/in-the-gaudy-supermarket>>
- Foucault, Michel. "Intellectuals and Power: A Conversation between Michel Foucault and Gilles Deleuze." *Language, Counter-Memory, Practice: Selected Essays and Interviews*. Ed. Donald F. Bouchard. Trans. Donald F. Bouchard and Sherry Simon. Ithaca: Cornell UP, 1977.
- Maggio, J. "'Can the Subaltern Be Heard?': Political Theory, Translation, Representation, and Gayatri Chakravorty Spivak." *Alternatives: Global, Local, Political* 32.4 (2007): 419-444.
- Nichols, Robert. "Postcolonial Studies and the Discourse of Foucault: Survey of a Field of Problematization." *Foucault Studies* 9 (2010): 111-144.
- Spivak, Gayatri Chakravorty. "Can the Subaltern Speak?" *Marxism and the Interpretation of Culture*. Eds. Cary Nelson and Lawrence Grossberg. Basingstoke: Macmillan Education, 1988. 271-313.
- . *A Critique of Postcolonial Reason: Towards a History of the Vanishing Present*. Cambridge, Massachusetts: Harvard UP, 1999.
- . "The Politics of Translation." *Outside in the Teaching Machine*. Gayatri Chakravorty Spivak. New York: Routledge, 1993. 179-200.
- Spyra, Jen. "Friends Don't Let Friends Say 'Althusserian Exegesis'." *The Current* (Spring 2006). <<http://www.columbia.edu/cu/current/articles/spring2006/syra.html>>
- 喜多加実代. 「語る／語ることができない当事者と言説における主体の位置——スピヴァクのフォーコー批判再考——」. 『現代社会学理論研究』3号 (2009年). 111-123頁.
- 後藤浩子. 「ガヤトリ・スピヴァク——デリダ以後」. 『大航海』34号 (新書館、2000年6月号). 108-115頁.
- 崎山政毅. 「文体に抗する『文体』——サバルタン研究の批判的再考のための覚書——」. 『思想』. 866号. 岩波書店、1996年第8号. 146-177頁.
- スピヴァク、G.C. 『サバルタンは語るができるか』. 上村忠男訳. 第1版第2刷. 東京：みすず書房、1998年.
- . 『ポストコロニアル理性批判——消え去りゆく現在の歴史のために』. 上村忠男・本橋哲也訳. 東京：月曜社、2003年.
- スピヴァク、ガヤトリ・チャクラヴォーティ. 「翻訳の政治学」. 鵜飼哲・

本橋哲也・崎山政毅訳. 『現代思想』 24巻8号 (青土社、1997年7月号).
28-52頁。

フーコー、ミシェル. 「知識人と権力」. 『フーコー思想集成 IV 規範／社会』.
蓮實重彦・渡辺守章監修. 東京：筑摩書房、1999年.

モートン、スティーヴン. 『ガヤトリ・チャクラヴォルティ・スピヴァク』.
本橋哲也訳. 東京：青土社、2005年. (原著は2003年)

本橋哲也. 「サバルタンはスピヴァクできるか? ——カルチュラル・スタ
ディーズとポスト・コロニアリズムの位相」. 『月刊 言語』 29巻3号 (大
修館書店、2000年3月号). 66-73頁.